朝鮮通信使とは

始まりは室町時代

- 「朝鮮通信使」とは、朝鮮国王が日本の将軍に対して派遣した使節団のことで、永和元年（１３７５）に、室町幕府第３代将軍足利義満が派遣した日本国王使に対し、当時朝鮮半島を支配していた高麗王朝が返礼のため「信（よしみ）を通わす使者」を派遣したのが最初です。

豊臣秀吉による朝鮮侵攻

- しかし、豊臣秀吉による文禄元年（１５９２)、慶長２年（１５９７）計２度の朝鮮出兵により、両国の国交は途絶えました。

徳川家康による国交回復

- その後、慶長５年（１６００）関ヶ原の戦いに勝利し、同８年征夷大将軍に任ぜられた徳川家康は、対馬・宗(そう)氏を通じて朝鮮との修好に尽力し、慶長１２年（１６０７）朝鮮国から正式の使節団が派遣されるに至りました。当初は、日本からの国書に対する回答と、「刷還（さっかん)」、つまり豊臣秀吉による朝鮮出兵の時に日本へ連行された朝鮮の人々の所在を調査し送還することが目的でしたが、寛永１３年（１６３６）第４次朝鮮通信使の来日から、本来の目的である信を通ずるために使節団が派遣されることとなりました。

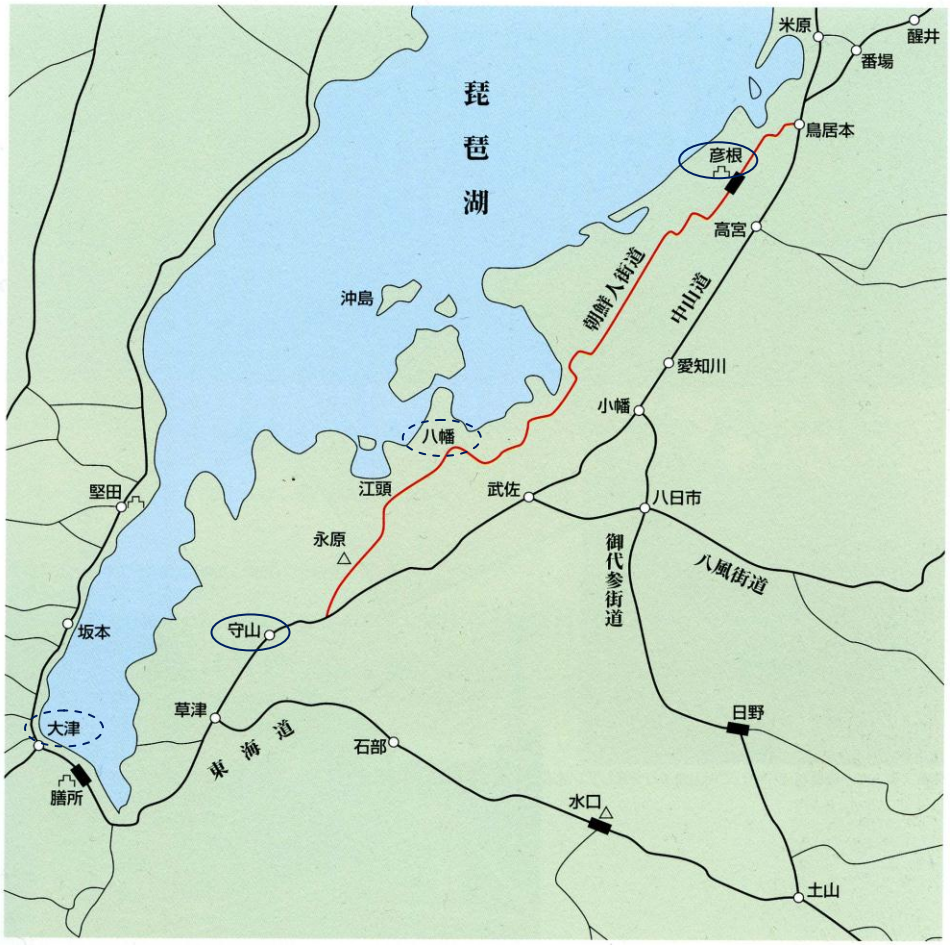
1. 朝鮮人街道

・　通信使が通った道

（全行程）

・　朝鮮通信使が母国を離れ、将軍と江戸で拝謁するまでの旅路はおよそ２０００キロメートルです。経路はいまのソウルからはじまり、朝鮮半島を縦断してプサンまできます。プサンから海路で、東シナ海をわたって長崎の対馬に着きます。対馬から壱岐にわたり、福岡沿岸部より山口県下関に入ります。その後も瀬戸内海の中国地方側を海路で、大阪まで行きます。大阪に船を停泊させ、京都の伏見まで川御座船で淀川を登り、ここから陸路になります。現在の滋賀県、岐阜県、愛知県、静岡県、神奈川県をとおり江戸、現在の東京に入り、将軍に国書を届けたのでした。

（県内）

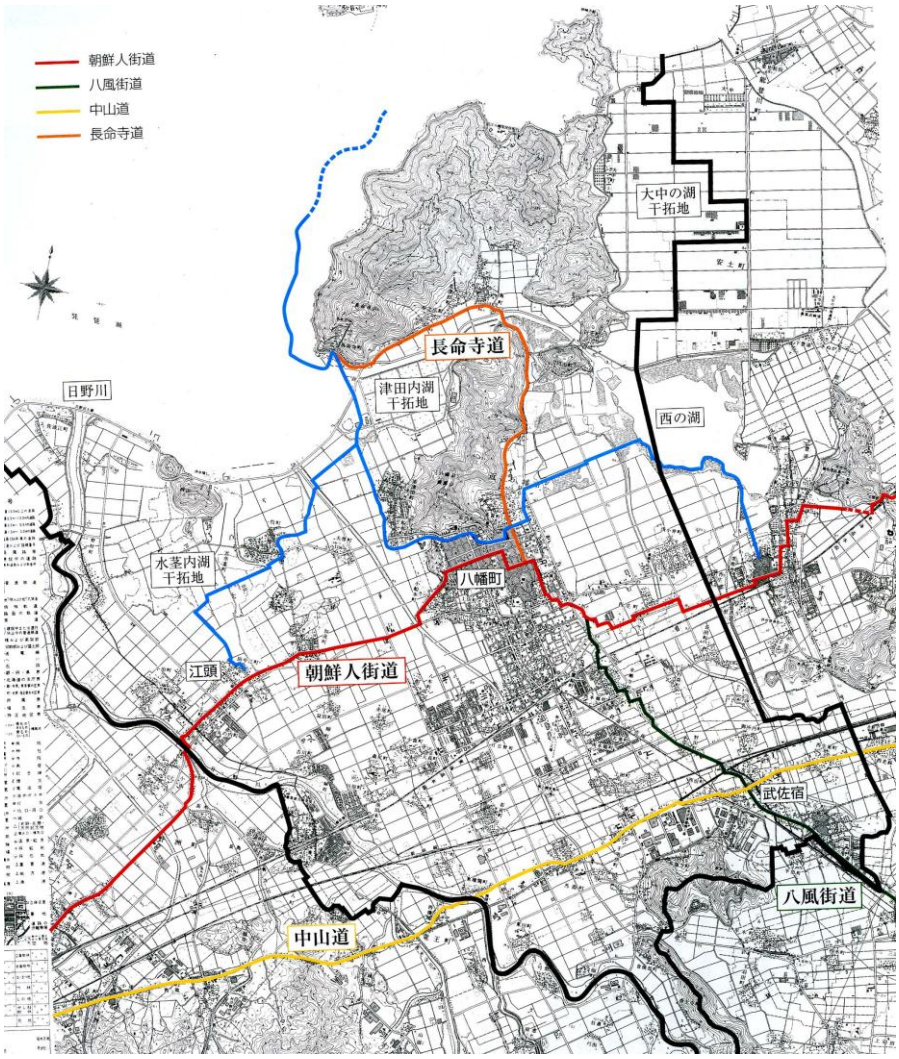


・　滋賀県内は、京都から大津で昼食休憩、中山道をとおり守山で一泊します。その後、野洲の小篠原で中山道から分岐した道をとおり、八幡で昼食休憩、彦根で一泊し、鳥居本で再び中山道と合流し、美濃、現在の岐阜県に入ります。この小篠原から鳥居本、約４２キロメートルの道が朝鮮人街道です。

・　陸路に入ってから、通信使は中山道や東海道という宿場の整備されたいわゆる江戸時代の主要街道を通るのですが、小篠原から鳥居本だけは外れてしまいます。その理由は定かではありません。慶長５年(1600)関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康がこの道を通り上洛したことから「吉例の道」であること中山道沿いの武佐、愛知川、高宮の宿場町では、通信使のような大人数の接待ができない、琵琶湖を望む風光明媚な景色を見てもらえないなど、諸説ありますが、譜代藩で徳川将軍家の信頼も厚い井伊家の城下町彦根に滞在させるため、その手前に宿場町ではないが富裕な在郷町八幡で昼食の対応ができるというのが有力であると考えられます。また、さきにも話しましたが将軍家が京に向かうときもこの道を使っていたこともその理由のひとつと考えられます。

・　そのため、この道は御所街道や上洛街道ともいわれます。

（市内）



・　「使行録」と呼ばれる通信使の記録のひとつ、慶長１２年（１６０７）第１次来訪時の「海槎録」には、「(宿泊地の守山を出発して四里ほど進んだ後）三里行くと八幡山があり、城が山によって築かれており、民家が繁盛していた。かつて(豊臣)秀吉の甥秀次の居城である。」と、八幡の町の様子が記されています。但し、この時の昼食休憩地は八幡ではなく伊庭(東近江市)でした 。

・　第 10 回、寛延元年（１７４８）の「使行録」である「奉使日本時聞見禄」には「加茂村を通過するに、村人の数がやや賑やかになった。狭い小溝（水路）を通って近くまで入って泊まる川船はまるで鱗のようである。船には幔幕を張り巡らしていた」と記されています。

2. 江戸時代朝鮮通信使の来日回数

以降文化８年（１８１１）まで計１２回、友好のための使節団が朝鮮から日本へ派遣されたのです（**表 1**)。

さて、八幡は通信使の昼食休憩場所となりましたが、何回立寄られたでしょうか。実は 9 回です。第 2 次は京都まで、最後の第１２次は対馬までとなっており、八幡を通過すらしていません。あと１つは第１回、この時の昼食場所は八幡ではなく、現在の東近江市の伊庭でした。実は、将軍家が下向、つまり江戸から京都へ向かう場合、宿泊休憩場所が決まっており、伊庭がそれにあたりましたので、休憩先になったといわれています。このとき、八幡は通過地でした。

通信使の行列

（先頭）

（国書）

（正使）

- 使節団の人数は 4～500 人という非常に大規模なものでした。
- 中心は三使とよばれる正使・副使・従事官の三人でした。彼らは将来、朝鮮政府の首脳となるべき立場のひとびとでした。そのほか通訳や所に秀でた人物が通信使の上層部にあたりました。その次が、上官と呼ばれるクラスの人々で、やはり書や美術に秀でた者、医者、道中の記録者で文官と呼ばれる、いわゆる官僚の立場の人々が中心に構成され、一部武官とよばれる今でいう軍隊クラスの上層部が含まれました。その次が次官とよばれる人々で、馬上才と呼ばれる曲乗りのできる騎手や楽隊、料理人、船長などで構成されました。その次が中官です。大半が武官で、楽隊や旗手、荷物持ちなどで構成されました。最後が下官で、護衛兵や船乗りで構成されました。

朝鮮人街道での馳走

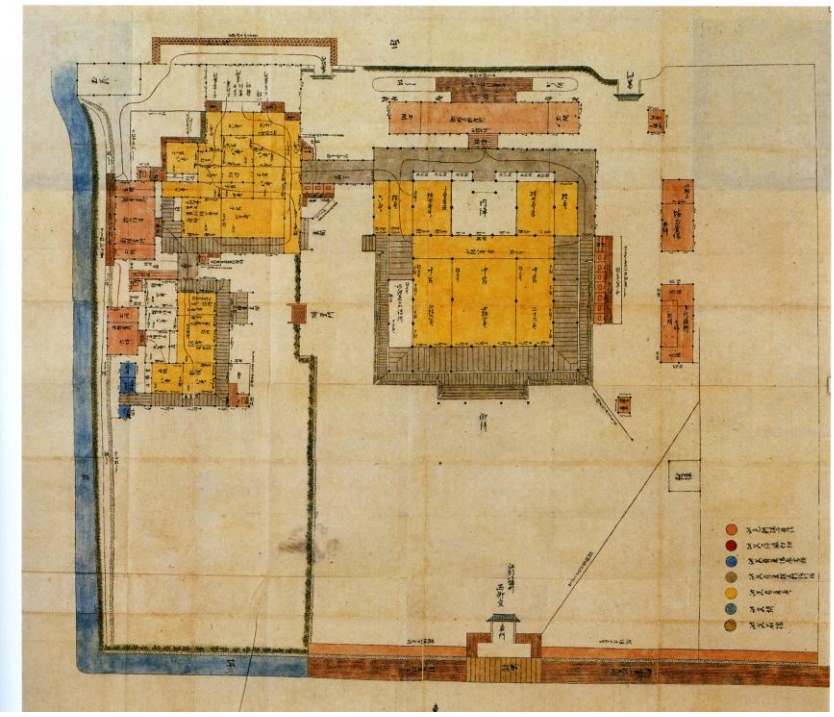
- 八幡での饗応
- 第８次の宿割

宿	役職･人数
西本願寺御堂	三使(正使１人、副使２人)、上々官３人、上判事３人、製述官１人、上官 35 人、次官８人、中官 144 人、下官 174 人
大黒屋久兵衛/帯屋庄兵衛/薬屋五兵衛/柴屋又助/桝屋兵左衛門/菊屋弥右衛門/紙屋平三郎/一文字屋又三郎	下官 190 人　〆８軒畳数 250 畳余
堺屋権兵衛/加茂屋庄右衛門/桔梗屋庄太郎/菊屋庄兵衛/塩屋九郎兵衛	通詞（頭衆）10 人、通詞 114 人程　〆５軒畳数 140 畳余
宝積寺	長老衆
蚊屋庄左衛門	同（長老衆）
納屋九兵衛	侍衆
羽田屋平兵衛	長老衆下々
玄弓/からや久左衛門/数珠屋清右衛門/紅粉屋孫太郎/塩屋忠次郎左衛門/数珠屋清兵衛/数珠屋五右衛門/日野や理左衛門/綿屋茂兵衛/箔屋甚兵衛/丸屋権兵衛/油屋作兵衛	信使附宿 12 軒（人数不明）
羽田屋平兵衛	長老衆下々
正福寺	宗対馬守
堺屋権右衛門・馬渕屋金右衛門	宗対馬守御家老
寺内西町　簾や吉右衛門	町合御番所
三丁縄手　筆屋次兵衛	三丁縄手御番所
中村屋三郎兵衛	御馳走役 市橋下総守
扇屋庄右衛門	御賄方 角倉与一
扇屋伝兵衛	御賄方 竹田喜左衛門
鮨屋杢右衛門	御人馬判 平岡孫市
西川庄右衛門	都築小三郎
塩屋次郎右衛門	竹村太郎左衛門
御宿６軒　家名略	御砲目付　服部宇右衛門、吉田権右衛門、伊藤杢左衛門、安田藤兵衛、山崎茂左衛門、竹下十右衛門

- 饗応接待の場所ですが本願寺八幡別院をメインに、朝鮮人街道沿いの寺や商人屋敷が接待場所となりました。八幡での昼食休憩時、通信使一行のうち三使や上官・中官の休憩先は本願寺八幡別院でした。江戸時代は金台寺（こんたいじ）と呼ばれ、朝鮮通信使関係の記録には大半がこの呼称で記されています。同寺が通信使の接待場所となったのは、第 3 次来訪（寛永元年・1624）より第 11 次来訪（明和元年・1764）の 9 回です。

・　下官などは朝鮮人街道沿いの町人屋敷を休憩先としてあてられました。地元に残る通信使宿割り図には、街道沿いで宿となった屋敷の間取りが描かれており、宿の家主名等から、第 11 次来訪のものと推定されています。西側は寺内西町から描かれており、東側は背割りの溝を挟んで魚屋町まで確認することができます。

・　八幡別院



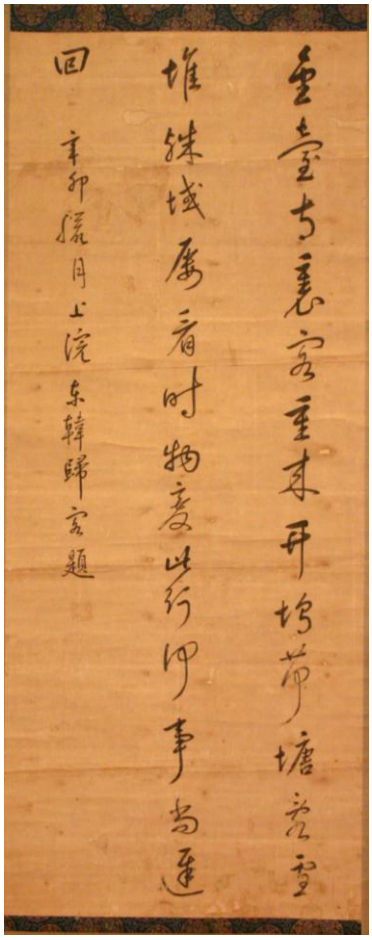
・　さて、通信使の饗応料理ですが、宿泊地すなわち夕食と昼食では、供される料理は異なりました。特に三使、上々官には、夕食時は３膳で本膳に７品、二の膳に５品、三の膳に３品が盛られた「七五三(しちごさん)の膳」が、昼食時も３膳ですが、本膳が５品の「五々三(ごごさん)の膳」が供されました。これらは歓迎の儀式のさいに供されるもので、その儀式が終わると夕食時には「三汁(さんじゅう)十五菜(じゅうごさい)（３種の椀物、１５種の料理)」が、昼食時は数種の料理と菓子が供されました。

・　さきに紹介した『奉使日本時聞見録』には、八幡別院に関する一文が記されています。

・　「昼食の館に入って行ったが即ち八幡山の金台寺である。壮麗ではないが、また自ずと瀟洒であり配置された凡ての諸具が森山（守山）より優れていた」

・　さて、八幡での五五三の膳の内訳を紹介しましょう。本膳には「鯛の焼き物／蒲鉾／和交（あえまぜ、するめに香の物やショウガを混ぜた物／唐墨／香の物」、二の膳は「ふくめ（鯛や鱈を煮て乾燥し、細かくほぐした物）／小桶（うるかがはいる）／貝盛／鮎鮓／蛸」、三の膳は「羽盛（鶏肉を焼いた物）／舟盛（伊勢海老）／螺（巻き貝を煮て盛りつけた物）」がもられています。

・　出される料理は、慶事(けいじ)に用いやすく彩(いろど)りもよい鯛や鯉、朝鮮の人々の好物である鶏肉や玉子、また各地の特産物がだされました。八幡ではなれずしのひとつ「鮎鮓(あゆずし)」なども供されています。



・　李邦彦詩書

第８次通信使来訪（正徳元年・1711）の帰国時、三使のうちの従事官である李邦彦から七言絶句の詩が贈られています。

【翻刻】

金台寺裏客重来/竹塢荷塘乱雪堆/殊域属看時物変/此行何事尚遅回

辛卯臘月上浣　　東韓帰客題

【要約】

金台寺に再び訪れると、竹垣に雪がうず高く積もっている。移りゆく時間はしばしば私たちの見るものをかえる。（この旅で）私たちはなんと長い時間を（異国で）過ごしているであろうか。

八幡町絵図（市指定文化財）